Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-04-29

# Other-Initiated Repair in Japanese:Accomplishing Mutual Understanding in Conversation

Suzuki, Kana

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2010-09-25
(Date of Publication)
2011-02-18
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲5093
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005093

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 鈴木　佳奈 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士（学術） |
| 学 位 記 番 号 | 博い第 5093 号 |
| 学位授与の 要 件 | 学位規則第 5 条第 1 項該当 |
| 学位授与の 日 付 | 2010 年 9 月 25 日 |

【 学位論文題目 】

Other-Initiated Repair in Japanese:Accomplishing Mutual Understanding in Conversation（日本語会話に見られる「他者開始修復」: 会話における相互理解の達成）

審 査 委 員

主 査　教 授　加藤　雅之
准教授　グリア　ティモシー
教 授　定延　利之
大阪教育大学教授　串田　秀也

［課程博士用］

# 論文審査の結果の要旨

| | | | |
|---|---|---|---|
| 氏　名 | 鈴木佳奈 | | |
| 論文題目 | Other-Initiated Repair in Japanese: Accomplishing Mutual Understanding in Conversation<br>（日本語会話に見られる「他者開始修復」：会話における相互理解の達成） | | |
| 判　定 | 合　格・不　合　格 | | |
| 審査委員 | 区　分 | 職　名 | 氏　名 |
| | 主　査 | 教授 | 加藤雅之 |
| | 副　査 | 教授 | 定延利之 |
| | 副　査 | 畑教育大学 教授 | 串田秀也 |
| | 副　査 | 准教授 | ティモシー・グリア |
| | 副　査 | | 印 |

## 要　旨

本論文は、自然会話に頻出する「他者開始修復（聞き手が話し手の発話にトラブルがあることを指摘する）」を手がかりに、特に、日本語母語話者同士の会話を材料に、以下の３点の解明を目指したものである。

１．日本語母語話者が会話の中で遭遇する聞き取りや理解に関するトラブルとその解決方法(すなわち他者開始修復の方法）を特定する。

２．英語会話と日本語会話での他者開始修復の共通点と相違点を示す。

３．話されている物事に関する会話参加者の知識状態が、聞き返すという行為自体にどのような意味を持つのかを明らかにする。（なお、論文は英語で執筆されている。）

論文の構成は以下の通りである。

第１章では「他者開始修復」の概念とメカニズムを説明し、この会話現象を参加者間の相互理解の達成とのかかわりで研究することの意義と重要性を分析している。

第２章は本研究が依拠する会話分析の理念、データ分析法の特徴と利点を述べるとともに、使用された会話データ（家族や友人間の電話会話や会食やドライブ中の会話、新聞販売店と顧客間の電話会話、大学の授業中に行われたグループディスカッション等）の性質や収録方法についてまとめている。

第３章は先行研究の詳細な分析である。

本研究の中核となる第４章～第６章のうち、４章では多くの会話事例をCA（会話分析）の手法を用いて詳細に分析・記述した上で、日本語母語話者が行う他者開始修復を類型化し、修復を開始する７つの形式を特定している。さらに英語母語話者が行う他者開始修復との基本的な仕組みの類似性も確認された。

第５章では、日本語の文法的特性のひとつである「文法項の省略」と他者開始修復との密接なつながりが論じられ、一般に主語や目的語などの文法項が省略されていても、その発話は問題なく理解されうると考えられているが、実際の会話では省略された発話要素を補うよう話し手に求めるための特別な修復開始方法があることを明らかにしている。

第６章ではある俳優の名前について言い間違いが指摘された会話事例をとりあげ、通常の手続きで開始された修復連鎖が通常の範囲を超えた長さに拡張され、その中で言い間違いを指摘した者と指摘された者がどちらが「より多くを知る者」「より熱心なファン」なのかをめぐって交渉する様子を詳しく検討した。

最終章では、本研究による知見をまとめて確認するとともに、修復を開始するという行為が会話の中での人々の相互理解の達成にどのように寄与しているかが論じられている。

この論文の独創性として以下の点があげられる。

（１）日本語の会話における他者開始修復の研究として、先例のない体系的広がりと深さを持っており、このテーマに関する先駆的研究として、今後の研究者が必ず参照しなければならない重要性を備えている。

（２）日本語の会話現象に関する会話分析のアプローチによる研究として、とりわけ「相互行為と文法」の関係を考察したものとして、いくつかの先行研究と並んで最高水準の分析の質が確保されている。

（３）４章において、一方で他者開始修復の「文脈から自由」な組織を体系的に記述しつつ、他方でその組織が各事例の固有の文脈にいかに感応して用いられているかを丁寧に分析している点は、著者のデータ分析の力量が極めて高い水準にあることを証拠立てている。

（４）他者開始修復に関する研究の国際的文脈において、日本語の文法的特性に注目した５章および修複と知識の所有との結びつきを考察した６章は、いまだ注目されていない斬新な知見を提供しており、国際的にもこの分野の第一級の研究成果となっている。

以上により、本審査委員会は審査員全員一致で、本論文は他者開始修復について重要な貢献をなしたと判断し、学位申請者鈴木佳奈は博士（学術）の学位を得る資格があると認めるものである。

既発表論文

鈴木佳奈「『より知る者』としての立場の確立―言い間違いの指摘とそれに対する抵抗」『インタラクションの境界と接続―サル・人・会話研究から』昭和堂，pp, 318-339, 2010.（分担執筆）

K. Suzuki, et. al. “An exploratory study for analyzing interactional processes of group discussion: The case of a focus group interview,” *AI & Society*, 23(2), 2009 pp. 233-249.（査読付）

# 論 文 要 旨

氏名　鈴木　佳奈
専攻　グローバル文化専攻外国語教育コンテンツ論
指導教官氏名　Dr. Timothy S. Greer

論文題目

Other-Initiated Repair in Japanese: Accomplishing Mutual Understanding in Conversation
（日本語会話に見られる「他者開始修復」：会話における相互理解の達成）

論文要旨

本研究は，日本人が会話において相互理解を達成する手続きを，「他者開始修復」という会話事象をてがかりに解明する。会話の進行には，会話参与者がお互いの発話をその都度理解することが前提となる。通常であれば，ある発話に対して，適当な応答が返されたことをもって，応答者が先の発話を問題なく理解していることが確認される。一方，聞き手が発話の聞き取りや理解にかんしてなんらかの問題を見出した時，その場で他者開始修復が発動される。本研究は，他者開始修復が参加者の相互理解を促す仕組みを明らかにするために，会話分析の手法を用いて，以下の３つの問いに答える。

(1) 日本語会話において，他者開始修復がどのように組織化され，運用されているのか。
(2) 修復と日本語の文法的特徴との間になんらかのつながりがあるか。
(3) 修復の遂行に，会話参与者の知識状態が関与するのか。

本論文第１章では，「他者開始修復」とはどのようなものかを説明し，この会話現象を参加者間の相互理解の達成とのかかわりで研究することの意義と重要性を述べた。

第２章では，本研究が依拠する会話分析の理念，データ分析法の特徴と利点を述べた。また，本研究で使用する会話データの性質や収録方法についてまとめた。

日本語での他者開始修復が，「聞き返し」という現象として主に日本語教育の分野で研究が行われてきた一方で，英語母語話者間の会話に出現する他者開始修復についてはすでにある程度の研究成果が蓄積されている。第３章では，それらの先行研究を参照しつつ，会話における修復の基本的な組織化について概説した。また，比較言語的な視点からの研究や，言語教育の分野での関連研究をも概観した。



第４章から第７章までが本研究の中核となる。まず第４章では，多くの会話事例から，日本語母語話者が行う他者開始修復を類型化し，修復を開始する７つの形式を特定した。それに先がけて，一つ一つの事例について，どのように聞き取りや理解の問題が発生しており，それが他者開始修復によってどのように解決されているのかを詳細に分析・記述した。さらに，英語母語話者が行う他者開始修復との基本的な仕組みの類似性も確認された。

第５章では，日本語の文法的特性の一つである「文法項の省略」と他者開始修復との密接なつながりを論じた。一般に，主語や目的語などの文法項が省略されていても，その発話は問題なく理解されうると考えられているが，実際の会話では，省略された発話要素を補うよう話し手に求めるための特別な修復開始方法があることが明らかになった。また，修復開始と，それに応じて欠けた発話要素が充足されるという一連の手続きを通して，ある発話が，会話の当事者たちにとって，欠けた要素があるがゆえに問題のある発話として認定され対処されるプロセスについても述べた。

他者開始修復は，基本的には発話の聞き取りや理解の問題を解決するために遂行されるものであるが，一方で，修復の開始によって，今話されている事柄について聞き手がどのような知識状態にあるのかが他者にも明らかになる。当該の事柄について知らないために修復が開始される場合もあれば，そのことをよく知っているからこそ聞き返す場合もある。後者の典型が「言い間違いの指摘」である。本章では，ある俳優の名前について言い間違いが指摘された会話事例をとりあげ，通常の手続きで開始された修復連鎖が，通常の範囲を超えた長さに拡張され，その中で言い間違いを指摘した者と指摘された者が，どちらが「より知る者」「より熱心なファン」なのかをめぐって交渉する様子を詳しく検討した。

最終章では，本研究による知見をまとめて確認するとともに，修復を開始するという行為が，会話の中での人々の相互理解の達成にどのように寄与しているのかを論じた。発話の聞き手にとっては，他者開始修復は，発話の理解の不成立を最小限にとどめ，早いうちに問題を取り除くための手段となる。一方話し手にとっても，聞き手からの他者開始修復は，聞き手の理解に応じて自身の発話を再構成し，聞き手のよりよい理解を促すため手がかりとなる。他者開始修復と会話における相互理解の達成についての本研究は，人間の言語使用，相互行為の遂行，コミュニケーションについての我々の知識と理解を深める，意義深い研究であると考える。

## Acknowledgements

It has been over twelve years since I started my PhD program in 1998. Without the guidance and encouragement of a large number of people, this study would never have been completed.

First of all, I would like to express my deepest appreciation to the three main supervisors who have supported me throughout my graduate studies.

The fundamental ideas for the study were acquired and developed when I was under the supervision of Dr. Rebecca Clift at University of Essex, UK. She guided me into the fascinating world of Conversation Analysis. Innumerable comments and insightful advice provided by her were an invaluable help for me in learning what CA is about and in improving my skills for looking at conversation in depth.

Dr. Aoi Tsuda, my supervisor at Osaka University, was the first person to show me that analyzing natural talk could be an intellectual endeavor. I also learned from her how to be a sincere and hard-working researcher.

Dr. Timothy S. Greer at Kobe University stood by me when I was at the final stage of refining and completing the study. His warm and patient encouragements have carried me through the hard times.

It was a great honor to receive intensive training as a Conversation Analyst from Dr. Emanuel A. Schegloff, Dr. Gene Lerner, Dr. John Heritage, and Dr. Don Zimmerman in a six week CA Practicum in the LSA Institute in the summer of 2001. These professors, as well as Dr. Paul Drew and Dr. Gail Jefferson, later also offered other CA training courses, through which they firmly demonstrated how CA research should be conducted. The wonderful experiences I had in those seminars have formed the foundation of this study.

I would like to extend my thanks to my fellow Conversation Analysts in Japan, the UK and the USA. In particular, the countless discussions I have had regarding Japanese talk-in-interaction with Dr. Shuya Kushida, Dr. Ikuyo Morimoto, Dr. Aug Nishizaka, Dr. Makoto Hayashi, and Dr. Hiroko Tanaka have proved to be a constant source of inspiration.

My sincere gratitude also goes to those who generously allowed me to record their conversations and made them available to me. The richness of the material amazes me every time I look at it. This



study represents just one outcome drawn from these valuable data.

Finally, I wish to give special thanks to my family. My mother and father have been understanding and supportive to me over the years as I pursue my career in the academic world. I dedicate this work to my partner Nao for his love and to a new life who will be a member of our family soon.